

社会と向き合う

不可抗力に逆らわず、可抗力の統制に集中する

不可抗力に逆らわない

世の中には、自分でコントロールできるものと、できないものがある。おそらく多くの人がその事実に基づいているはずである。ところが、コントロールできない不可抗力に対して、不安や不満を募らせる人は驚くほど多い。

私ははつきりと線引きをしてみたほうがいいと思っている。自分でコントロールできない**不可抗力には逆らおうとせず、自分でコントロールできる可抗力の統制に集中する**ということだ。

内面の革命は、まさにその象徴といえる。他者をはじめ、自分の外にあるものは変えられないが、自分の中にあるものは自分でコントロールして、変えていくことができる。

いくら他者を、あるいは周囲や社会を変えようとしても、それは自分のコントロールできない範囲のことであると強く認識するべきなのだ。自分にできることは、コントロールできる可抗力に集中することだ。

例えば、結果についての捉え方もそうである。就職の面接で合否を判定するのは、企業である。競技会やコンクール、コンテスト、商談やプレゼンテーションも同様、評価するのは他者なのだ。自分ではどうしようもない。自分にできることは、その時点でできる最高のパフォーマンスをするだけである。結果は自分では決められないのだ。

このあたりの線引きがぼんやりしていると、クヨクヨと思い悩んだり、不安が消えないままになってしまったりする。結果は相手に委ね、自分は限られた時間の中で最善の集中を高めてやっていくことしかない、と気づかなければいけない。

逆にこの線引きができるようになると、結果を過度に意識せず、必要なパフォーマンスに集中できるようになる。結果が出たら、結果を真摯に受け止められるようになる。そうすれば、すべての瞬間において、穏やかに過ごせる。余計なプレッシャーにさいなまれることもなくなる。

ただ、年月を経て自分が成長していくにつれて、自分にコントロールできない不可抗力の部分も少しずつ減らしていく意識を持つていくことは必要だ。例えば、いま他者を変えられないとしても、努力を積み重ね、実績を出すことで、自分の説得力は高まり、その結果、他者を変えられる可能性は高まる。

不可抗力に縛られることなく、統制できる領域を増やしていくのだ。それは、運命の女神に委ねる領域を減らしていくことを意味している。いきなり自分の思い通りの人生にすることは難しい。しかしこうして少しずつ、自分らしい人生を少しずつ形作っていかばいいのである。

普遍的な真実はない。社会的な真実があるだけ

小学校5年生から一人暮らしをし、自分と向き合う機会を持ち続けた私は、ひとつの大きな疑問を持つに至った。それは、**世の中というのは信じるに足るものか**、ということである。世の中を本当に信用していいのか、世の中が語る『正解』は本当に正解なのか、と10代から疑問を持っていたのだ。

それが確信に変わったのは、故郷を出て複数の国での生活を経験した後である。世の中

には、ひとつの正解などない。それがはつきりわかった。なぜなら、それぞれの国において、同じ問題に対し、導き出された正解がまるで違っていたからである。

世の中の人々は自分の置かれた状況の中で、自分の利害の中で判断をして、正解や真実というものを創り出しているに過ぎない。社会的な真実は複数あり、それが共存しているのが社会なのだ。真実というものは極めて気まぐれで、うさん臭いものなのである。

社会学に科学知識の社会学という領域があるが、研究者トーマス・クーンは、『科学革命の構造』において、パラダイムという概念を提示している。科学知識は科学の真実であり、絶対的な真実だと思われがちだが、その生成プロセスをよくよく見てみると、それがいかに政治的な闘争や社会性に基づいて構築されたものなのかがわかる、と。代表的な例に、天動説や地動説を挙げている。

つまり、社会の中で大多数が、あるいは権威のある人たちが決めたものが、その社会の中で真実として受け入れられているのである。それによって社会は動いているということだ。トーマス・クーンの研究対象は自然科学だが、社会科学や政治経済の領域となると、さらにひどい状況だろう。真実というものはひとつではないということが、間違いなく言えるのではないかと思う。それは時代といった時間軸にも依存するし、場所といった空間

軸にも依存する。

もちろん「 $1+1=2$ 」というのは、絶対的な真実である。しかし、こうした絶対的な真実というのは、極めて限られている。それ以外の、生きていく中での真実と呼ばれているものは、本当はある意味でかなり危ういものであると理解することが大切である。それはほとんど絶対的な真実ではなく、人為的に構築された社会的な真実に過ぎないからだ。

このことを頭に入れておけば、社会の中で真実と言われているものを自分が鵜呑みにしないという決意が生まれる。メディアで伝わる情報に対しても、批判的に考察することができる。いわゆるメディアリテラシーが身につくのだ。マスメディアで報じられることが必ずしも真実ではないという前提で世の中を見渡すことができれば、問題の真相に目を向けることができるようになる。世の中というのは、それほど単純なものではなく、極めて奥深く、複雑なものだということに気づける。

ただ、世の中の真実はうさん臭い、という理解だけにとどまってしまっただけはいけない。ここから一步、踏み出す必要がある。

社会的な真実は複数あり、
それが共存しているのが社会なのだ。
真実というものは極めて気まぐれで、
うさん臭いものなのである。

説得力によつて、社会的な真実を創りあげる

世の中の真実のうさん臭さが理解できたとしても、実際には世の中はそうした社会的な真実によつて動かされているという現実がある。つまり、社会的な真実には大きなパワーが潜んでいるということだ。

自分がもし、何事かを成し遂げようとするのであれば、この社会的な真実のパワーを活用せざるを得ない。そこには、人を大きく動かす力が潜んでいるからである。言葉を換えれば、周りを説得する力さえあれば、世の中を動かすことができるようになるのだ。

だからこそ、私が強調したいのは、**社会的な真実の持つうさん臭さを理解すると同時に、自らで社会的な真実を構築する力を入れること**である。それは、自分らしい人生を生き抜くための大きな武器になる。

誰かによつて構築された真実ではなく、自らの正義や善、志と一致した自らの真実を構築するのだ。そしてそれはやがて、自己実現にも、社会に対する貢献にもつながっていく。

だからこそ、社会的な真実を創りあげるためには、どんな力量が必要になるのかを、認識しておくことが大切になる。

何より、**周りを説得し、巻き込む力が必要だ**。説得力を生み出すひとつの方法は、自ら設定した目標に対して、努力をして結果を打ち出すことによって、周りから少しずつ得られていく信頼感の獲得に他ならない。まずは、そうした信頼を築き上げることだ。

そして伝える工夫を常に心がける。相手の立場に立って、相手に配慮した上で自分の考えていることを伝えていく。そうした心がけが、結果的に周りの共感を生む。

理解なき批判をしない

若い時代にしてしまいがちで、しかし絶対にしてはいけないのが、理解なき批判である。相手の声にしっかり耳を傾け、その上で批評することだ。だからこそ心がけたほうがいいのが、**最終的な判断を少し留保すること**である。さらに可能なら、判断のみならずポジテ

イブな要素を加えて返すことを意識する。

例えば会議で、Aという人がある案を出す。それがいい、悪いという評価をする前に、一度自分の中で受け止めてみる。その上で、この案にプラスアルファの価値を与えたり、もう一段上のアイディアに持つていくにはどうすればいいのかを自分で考え、それをプラスして返していくのだ。こうなれば、会議はより活性化し、生産的なものになっていく。

物事を短絡的に判断せず、相手が言おうとしていることの背後にある、この言葉が発せられた意味を想像しようとすると、より深い理解ができるようになる。その姿勢が相手に伝われば、大きな共感が生まれる。これは信頼の重要な一步になる。

共感なき賛同には説得力は生まれない。まずは相手を深く理解するところからスタートし、理解した上で、自分が導きたい最終的なゴールに向けて、相手を導いていく。その道筋を自らいくつか用意して、その都度、軌道修正しながら導いていけたなら、それはベストなステップとなる。

2 割話し、8 割聞く

コミュニケーションというと、いかに話すか、ということにばかり目が向く印象がある。しかし、相手が何を求めているかを理解せずに、いくら話しかけたところで、そこに共感や生まれない。コミュニケーションでは、話すよりもむしろ聞くことにこそ、力をかけたほうがいい。私はその心がけを、2割話し、8割聞く、と表現している。

相手に耳を傾けることは、相手を深く理解しようとしている姿勢の表れ。自分を理解しようとしてくれる人に対して、嫌な思いを抱く人はまずいない。それは**相手への、好意を示す重要なメッセージ**となる。

とりわけビジネスの現場では、お互い何らかの目的があつて会話をするのである。二人が異なる利害を持っているから交渉というものが生まれるわけで、取引の成立とは、お互いがトクをすることができるところに達したことを意味する。どちらかが損をするときには、取引は成立しない。いい取引というのは、お互いの利益が最大化される取引である。

だからこそ重要なのが、**相手の利益の構造を理解しておくこと**だ。自分の利益の構造は

わかつている。しかし、相手の利益の構造がわからなければ、お互いにとっての利益の最大化を図ることはできない。

相手が何を望んでいるのか、何を目的としているのか。自分の利益について語る前に、相手の話をよく聞くことだ。その姿勢は間違いなく相手にも伝わる。

これはビジネスの場合に限らずだが、聞くときには、話の内容や言葉だけでなく、醸し出す空気、仕草、目の動きや声のトーンなど、あらゆるところにセンサーを張り巡らせることが大切である。それによって、相手をより深く理解することができる。

信頼に足る人物かどうか、ということも、自分のセンサーをフル稼働させることによって、チェックすることが可能になっていく。

そして、こうしたコミュニケーションの経験を着実に積み重ねていくことだ。そうすれば、ある程度のコミュニケーションのパターンが自分の中に蓄積されていく。

相手が何かを言ったり、接するとき、自分の中でパターンがイメージできれば、よりコミュニケーションはうまくいくようになる。若い時代は、このパターンがまだまだ少ない。だからこそ、たくさんのコミュニケーション、より多様なコミュニケーションを意識

することだ。

一方でパターンがたくさん蓄積されていくと、パターンから外れたコミュニケーションが楽しいものになっていく。新しいパターンを自分の中で蓄積できるからである。いずれにしても、コミュニケーションというのは楽しいものである。それは、間違いないところだ。

残念なことに年配者の方に少なくないのだが、人の話を聞かない人もいる。そういう人に出会うと、幼稚さを感じざるを得ない。だが、それでも耳を傾ける姿勢は大切である。これもまた、パターンにつながるからだ。

逆に、人生を深めてきた年配者の中にも、本当に聞き上手な人もいる。聞く姿勢が、なおも強くあるのだ。こういう人たちとの出会いは、極めて刺激的である。人としての大きさや深さを実感する。うまく話を聞いてもらえるだけに、話しているほうの緊張感も高まる。これはとても勉強になる。若い人たちには、大事にしなければいけない出会いである。

空気を破る——自分は独立した存在であることを示すために

空気を読めない人、読まない人の存在が、日本でも一時、話題になったことがある。実際、社会生活を営む上では、空気を読むことは極めて重要である。空気を読まないということは、他者を理解しようとしめない、他者を拒否する、ということにもつながりかねないからである。

しかし、**読むべき空気と、読んではいけない空気がある**のも、また事実である。だからこそ私は、あえて破っていい空気もあると確信している。それこそ8割は空気を読む。しかし、残り2割については、空気を読むことに懐疑的になるのである。

なぜなら**空気というのは、いろんな人たちが出すオーラの結晶**としてあるものだからだ。だからこそそれなりにリスペクトするに足るものもある一方で、自分の感覚としては微妙に違和感を持つことも間違いなくあるはずなのである。何かが違うな、と感じる。自分のモノサシとは微妙にずれる。

そういうときに大事になるのが、そこで**しっかりと声を出す**ことである。自分は同意をできないうちに、していない、と意思表示をするのだ。出すことによって、場合によっては権威や大勢を敵に回すことになるかもしれない。しかし、出すべきときには、確固たる決意を持って出していく必要があるのだ。

それをしなければ、自分の本意でないところで自分が形作られていってしまう。他者のモノサシによって、自分の人生がどんどん流されていってしまうのだ。そして、いつの間にか、自分の人生は他人のモノサシに取って代わられる。

実際、問題意識を持って生きてきた人間の感性というのは、意外に鋭いものである。おかしいと感じたことは、本当におかしいことだったりする。実際、私も経験があるのだが、思い切って声を上げてみると、思わぬ共感の声や援軍が現れたりするものである。実は多くの人が、同じように違和感を持っていたということだ。

だが、多くの場合は、声を上げたくても上げられない空気が漂っているものである。権威であったり、人数であったり、固定観念であったり。しかし、その空気が破れた瞬間、新しい景色が広がっていく。多くの人たちが本音を言える環境が作られるようになる。

空気を破るときには、もしかすると白い目で見られるかもしれない、変人扱いされるかもしれないと感じるかもしれないが、結果的にそうなったとしても、自分を信じることだ。自分が本当にその信念を持っていたとしたら、周りの目など意識せずに声を出し、行動すべきである。

もし、自分の判断が未熟で、それが失敗に終わったとしても、空気を破ろうとしたという事実は残る。そこには学びの材料が生まれるし、自信も生まれるのだ。

常識を疑い、前提を疑う

常識や前提というのは、時に極めてありがたいものである。なぜなら、自分で物事について考えなくて済むからだ。これこれはこういうもの。そう信じてしまえば、本当にそうなのかを自分で試すことなく、面倒な経験をすることなく、受け入れてしまうことができる。

しかし、こうした物事を鵜呑みにする行為は、ある意味では自分を放棄する行為だと私は認識している。その場の空気についても、鵜呑みにする危険性が潜んでいるわけだが、それ以上に危険なのが、常識や前提なのである。

たとえ世の中で常識や前提と言われていたとしても、一度自分の中でじっくり吟味し、消化してみる必要がある。それは本当に信頼に足るものか。受け入れてもよいものか。しっかり検討してから、判断を下すことが重要だ。なぜなら常識や前提も、これまた極めていい加減でうさん臭いものだからである。

常識や前提も真実と同じであり、極めて社会的なもの、政治的なものだからだ。時間軸や空間軸にも依存している。そもそも100年前の常識は、今の常識にはならない。アメリカの常識が、必ずしも日本の常識ではない。その程度のものである。

そのときどきの社会の人々の多数決や権威によって、恣意的に作られたものでしかない。それが、常識や前提だ。天から降ってきた真理などではない。このことをしっかり認識しておく必要がある。

まずは、本当にそれは信じられるのか、自分自身に問うてみることだ。鵜呑みにするこ

となく、自分の中で冷静にじっくりフィルタリングする。もちろん、認められるなら、受け入れてもいい。

しかしもし、それが自分に合わない、受け入れられないとなれば、大勢と逆に行く勇氣を持つ必要がある。間違っているという意思表示をし、賛同する人たちを巻き込み、正しい方向へと変えていく。そんな変化の起点になるくらいの意識を持つてほしい。**社会を変えるのは大衆ではない。個人なのである。**その変革の起点に自分になるよう、力をつけていくことである。

人生は一度しかない。人生を進めていく上で間違った判断を自らに下してしまわないためにも、そうした行動の裏付けとしての実力を高める努力をすることが大切になるのだ。

むやみに自己主張はしない

自分の問題意識を大切にし、空気や常識や前提について鵜呑みにしないことは、極めて大事なことであるのは間違いない。だが、ひとつ注意しなければならないことがある。それは、**むやみやたらに自己主張をすることは、決して褒められることではない**、ということである。

重要なことは、自分の意志や主張を通すべきときには、どうしても通したいときにこそ通す、ということ。すべての場面において自分の思いが叶うわけではない。それが世の中の現実である。

そうであるならば、自分の中で優先順位の低いものは、たとえ多少、納得がいかなかったとしても、受け入れていく必要がある。自分らしい生き方に大した影響を与えないようなものには、それほど注意は払わない、ということだ。

もしここで、あらゆることに関して、自分の意には沿わない、と反旗を翻していたら、どういうことになるだろうか。それは間違はなく人々には受け入れられないだろう。ただ

単に、わがままな人間だというレッテルすら貼られてしまうかもしれない。そして肝心な、本当にこれだけはどうしても通したい、というものが出てきたとき、認められなくなってしまう可能性が出てくる。

自己主張をあまりにし過ぎると、人間に軽さが生まれてしまう。言葉にも重みは出ない。存在としての希少性も薄れる。逆に、希少性や重みを演出するためにも、むしろ普段は静かにしている、というのが私の考え方である。本当に自己主張をしたときに、周りが聞き耳を持つために、むやみな自己主張をしないのである。

だからこそ、**重要になってくるのが、自分は何を主張したいのか、という優先順位をしつかり考えておくことだ。**これを考えていないと、あれやこれやと主張してしまうことになりかねない。実際のところ、どうでもいいことを主張する人たちが、あまりに多い。

自分を大きく見せようという発言や主張も多い。誰それを知っている、こんなことを知っている……。そういう発言をすればするほど、むしろ自分を小さく見せていることに気づかなければいけない。問われているのは、実は本質だけなのである。

本質を語る人は、絶対にそういうことはしない。人脈を誇ったり、知を見せびらかした

りすることは無い。無駄な話もしない。自己主張をむやみにする人は、周りには魅力的には映らない。それが現実であることを知っておいたほうがいい。

多元的に物事を見る機会を作れ

社会に広がる物事を鵜呑みにしてしまう要因のひとつに、多元的な見方ができていないということが挙げられる。物事をひとつの方向からしか見ることができないのだ。メディアが報じていることだけを見ては、見えてこないことがたくさんあることに気づかねばならない。実は**多元的な価値を持つことこそ、物事を正しく見る目を養い、自己防衛力を高めることにつながっていく。**

キムゼミでは、年に3、4回、「全員プレゼン」というものを実施している。これは、何かのテーマを決めて、全員が異なる切り口で3分間、そのテーマについてプレゼンをす

る、というものだ。

例えば、ヨーロッパの経済危機をテーマとする。新聞に出ていることや、インターネットのニュースに載っているような解説は、あえて除外する。自分なりに関心のある切り口、しかも他のゼミ生とは重ならない切り口を見つけるのである。それこそ、ヨーロッパの経済危機がテーマなのに、内定取り消しから町工場や福澤論吉まで、様々なユニークな切り口で20人が素晴らしいプレゼンをしてくれた。

結果的に、ゼミ生の20人は自分が独自の切り口でプレゼンをするだけでなく、他のゼミ生のプレゼンを聞くことによって、メディアには掲載されていない、ヨーロッパの経済危機についての20個の新しい視点を手に入れることができたのである。ひとつの問題に対し、多角的な視点で捉えることができたわけだ。

こうなると、例えばテレビで解説者がヨーロッパの経済危機について解説していたとしても、そういう側面もあるが、違う側面についても自分は知っている、という認識ができるようになる。自分の観点を多角的、多角的に持つと、ある人の発言も異なる側面から見ていくことができる。他者を理解する能力も高まると同時に、他者と自分との問題の捉え方の違いも理解することができるのだ。

今や知識やデータはいくらでもインターネットで探せる時代になっている。問われているのは、デジタルの力ではなく、むしろアナログの力なのだ。自分自身の物事の捉え方や、情報の料理の仕方である。

例えばプラモデルのような、マニュアルを見ていかに速く完璧に作るか、が問われているのではない。レゴブロックのように、自分なりの形というものを自分の中でイメージネーションして組み立てる力が問われているのだ。そのイメージネーション力を高めてくれるのが、多元的な視点に他ならない。

多元的にメディアを使うのもよし、異なる世代の人々から意見を聞くのもよし。多元的に情報に接する意識を持つことだ。それは、物事を鵜呑みにしないだけでなく、自分だけの物事の捉え方やイメージネーションを養う上で、大いに役立つ。

見えないものを見て、聴こえないものを聴く

インターネットで検索して調べられるような情報の重要性は、どんどん低くなっている。誰でもアクセスができる情報だからだ。社会的に見れば、希少性が高いものほど、価値は高まる。インターネットによって、情報はその価値をどんどん減じている。

逆に、デジタルのインターネットでは見られない情報の価値は、どんどん高まっている。例えば、これも先に書いたアナログの持っている力であり、情報である。実際、人は日々、様々なものを見聞きしているが、さてどこまで本当に見えていたり、聴けていたりするのだろうか。そこにこそ、アナログの可能性は潜んでいる。

人と対峙していたとしても、見た目にばかりに、表面的なところにしか目を向けられない人もいる。しかし一方で、表面的なところからは見えない、もっと奥にあるオーラのよくなるもの、人間としての本質を感じ取れる人もいる。では、その違いはどこにあるのか。私には、**見えないものを見ようとしているかどうか、という意識こそが、その違いを生んでいるように思える。**

実際、見えないものを見ようとし、聴こえないものを聴こうとしている人たちには、それが見え、聴こえるのだ。そしてそれは、デジタルの世界では絶対に手に入らない情報なのである。

これだけ情報が広がったインターネット時代には、外からは見えないものや聴こえないものにこそ、本質があり、真実があり、価値が潜んでいる。

だからこそ、意識して育てていかなければいけないのが、**見えないものを見て、聴こえないものを聴こうとする力**だ。その有無が、これからの社会を生きていく上では、極めて重要になっていく。

しかし、見えないものを見て、聴こえないものを聴く力は、心がけて意識しなければ、永遠に得られない。永遠に見えないし、永遠に聴こえない。

もちろん今の段階では、見えないし、聴こえないだろう。まず重要なことは、その事実
に気づくことである。そこに気づくことができれば、初めてその力を意識することができ
る。そして、見よう、聴こうと、常にイメージしながら行動することだ。そうすれば、い
つかある日、自分に起きた変化に気づける。

誰も見たことのない地図へと塗り替えよ

かつて分類というものについて研究したことがある。知識についての政治性に興味があった私は、先にも書いたように真実は本当は真実ではないのではないかと、感覚的に認識することになった。ところが面白いことに、すでに構築されている真実を無意識的に受け入れると、それはそれなりに心地いいものになるのである。

同様に、無意識に受け入れると極めて便利な分類というものも、非常に政治的なものであり、社会的に構築されているのではないかと、という仮説を持った。実際、**分類の存在は、人々の思考構造を固定化させる力を持つ**。国籍もそうであり、業界もそうであり、ベジタリアンなどの嗜好もそうだ。

こうした分類でくくられた瞬間に、人間の頭は構造化されてしまうのだ。そしてその瞬間に、設定された分類を超えた新しい思考をすることが難しくなっていくのである。

だからこそ意識しなければならないのは、**社会にある分類は、実は自分の力で超えられ**

る、ということだ。分類のうさん臭さに気づき、分類に基づいてできている境界を疑ってかかるのである。これらは何らかの意図をもとに人工的に作られたもので、鵜呑みにすべきものではないと常に考えるのだ。

こうして私は、そこにある分類を壊し、再定義することこそが、当たり前前の思考を超える方法であり、新しい価値を生み出す方法だと気がついた。

真実と同様に、社会が作った分類を受け入れることは、心地良くて楽なことである。それを一度壊すことは思考の混乱につながる。しかし、そうすることによって、自分の力を高めていくことができるのだ。自分の力で分類を作り直す必要が出てくるからである。

こうしたプロセスをイメージとして捉えたとき、私の中に浮かんだのが、地図だった。地図には、すでに引かれている国境がある。しかし、国境がもしなかったとすれば、ただ陸と海でくくればいい。

思考をここからスタートさせるのだ。すでに国境が定められた地図ではなく、**国境のない地図から、どう自分なりの地図を創っていくか。**それこそ、その中でどう自分の国を創っていくか。そんな地図創りこそが、人生という旅なのではないかと私は思った。

自分の思考に、最初から制限を持たせてはいけない。それは人生に制限を設けることと同じである。必要なのは、誰も見たことがない地図を創ろうとすることだ。

社会にある分類は、自分の力で超えられる。
誰も見たことのない地図へと塗り替えよ。

